

# SHOW HEY シネマールム

★★★★★

## アプレントイス：ドナルド・トランプ の創り方 THE APPRENTICE

2024年/アメリカ映画  
配給：キノフィルムズ/123分

2025 (令和7) 年1月18日鑑賞

TOHOシネマズ梅田

Data

2025-9

監督・製作：アリ・アツパシ  
脚本：ガブリエル・シャーマン  
出演：セバスチャン・スタン/ジェ  
レミー・ストロング/マリ  
ア・バカローヴァ/マーティ  
ン・ドノヴァン/キャサリ  
ン・マクナリー/チャーリ  
ー・キヤリック/ベン・サリ  
ヴァン/マーク・レンドール  
/ジョー・ピンゲー

### 👁️👁️ みどころ

2025年1月20日(月)の夜、日本のニュースはトランプ大統領の就任式一色で染められた。各国の首脳やIT企業のトップたちが見守る中で、MAGA (Make America Great Again) をスローガンにした第47代大統領の最初の言葉は、「米国の黄金時代が始まる」だった。なるほど、なるほど・・・。

会場を変えて次々と大統領令に署名するパフォーマンスもすごいが、サインしたペンを会場に投げる姿は、TV番組『アプレントイス』のホスト(司会)業で鍛えられただけのことはある。とても78歳とは思えないタフさを全世界に見せつけた。もっとも、昨年の大統領選挙と上下院選挙で“トリプルレッド”を実現したものの、その差はわずか。また、「トランプ2.0」の任期は4年だが、勝負は中間選挙までの2年間だ。

師匠のコーン弁護士から“勝つための3つのルール”を徹底的に叩き込まれた彼は、対中国をメインとした貿易(関税)、安全保障、気候変動等の分野でそれを実践するはずだが、その成否は？うまくいけば、4年間の任期を超えてバンス副大統領やトランプ・ジュニア氏への権力承継も可能だが、逆にちょっとしたチョンボが出れば一気に崩壊するリスクも！対する独裁国家では、権力者の独裁期間は長期化しそうだから、不安も大きい。

片や、少子高齢化が進み、地方都市の消滅が危惧される日本には、NHKスペシャルドラマで再放映中の『坂の上の雲』が描いた高揚感は全くなく、若者たちの学力、気力を含む国力の低下は著しい。もっとも、自分の寿命を考えれば、そこまで心配しても仕方なし！平和憲法下で経済成長を続けてきたこの国に長く住み、自民党政治の中で団塊世代が優遇されてきたことに感謝しながら、今後のトランプ大統領の一挙手一投足に注目したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■1/20の大統領就任式の直前に鑑賞！APとは？■□■

2025年1月20日（月）、全世界の目はアメリカ合衆国第47代大統領に就任するドナルド・トランプ氏の“一挙手一投足”に集まった。冗談半分に「もしトラ」と言われ続けていた“トランプ 2.0”がいよいよ始動するわけだが、就任早々、約100本の大統領令が発令され、注目を集めた新聞僚たちが次々と活動を始めるから、その展開に注目！

トランプ氏については賛否両論があるが、私は基本的に大好き。良くも悪くも、日本の石破総理のように、一人で屁理屈をこね回すだけで、何の実行力も伴わない人物に比べれば、その面白さや期待度は段違いだ。もっとも、彼の本性を私が知っているはずはなく、そのすべてはマスコミ情報だが、断片的なマスコミ情報に比べれば、丹念な取材を元にしたながらも、ドキュメンタリーではなく、あくまでフィクションとして、『「哀れな坊や」と呼ばれた青年は、いかにして世界一ヤバい大統領になったのか』を描く本作は必見！まさにこれは「フィクションを超える衝撃のリアルストーリー」だ。そんな本作の公開は、大統領就任式の3日前の1月17日からだが、私はいち早く1月18日に鑑賞することに。

本作の原題は『THE APPRENTICE』だが、これって一体ナニ？それは後述のとおり「見習い」だが、そこまでの英語力を持っている日本人は少ないはず。そのためか、邦題には『ドナルド・トランプの創り方』という副題をつけたが、それって良いこと？それとも・・・？

## ■□■「師弟モノ」は面白い！“哀れな坊や”の師匠は誰？■□■

私は、本作と同じ日に『室町無頼』（23年）を鑑賞した。同作はタイトル通り、これまでほとんど映画化されたことのない室町時代をバックとした、蓮田兵衛と骨皮道賢を主人公にした面白い時代劇だったが、同時に蓮田兵衛と“カエル”と呼ばれるその弟子たる才蔵との「師弟モノ」でもあった。私には、「潜水艦モノは面白い」「始皇帝モノは面白い」等々の持論があるが、「師弟モノは面白い」もその1つ。その代表作は、ロバート・レッドフォード VS ブラッド・ピットの『スパイ・ゲーム』（01年）（『シネマ1』23頁）と、デンゼル・ワシントン VS イーサン・ホークの『トレーニングデイ』（01年）（『シネマ1』14頁）だ。「バディもの」も面白いが、「師弟モノ」は教訓めいたものが多いのが特徴だ。

本作は、不動産業を営む父フレッド（マーティン・ドノヴァン）の会社が破産寸前まで追い込まれていた20代のドナルド・トランプ（セバスチャン・スタン）が、政財界の実力者が集まる高級クラブで、悪名高き辣腕弁護士ロイ・コーン（ジェレミー・ストロング）と出会うところから始まる「師弟モノ」が前半のストーリーになる。そこでの第1のテーマは、コーン弁護士がなぜ「哀れな坊や」と呼ばれたトランプを気に入り、単なる依頼者と顧問弁護士の関係ではなく、トランプが成功するための師弟関係を結んだのかということ。そして第2のテーマは、コーン弁護士がトランプに伝授した「勝つための3つのルール」とは何か？そしてトランプは、それをどう理解し、どう実践したか？ということだ。

「師弟モノは面白い」と言っても、師弟関係は永遠に続くものではない。そして、その終わり方はさまざまだ。『室町無頼』では、徳政一揆で師匠の蓮田兵衛が死亡した後、弟子

の才蔵がその後継者として再登場してくるところで終わったが、さて本作は？

## ■□■「勝つための3つのルール」とは？■□■

2024年3月末日をもって弁護士50周年を終えた私には、弁護士の仕事についてはあれこれの“持論”がある。弁護士も人間だから、その性格は人それぞれだが、日本では何よりも「基本的人権の擁護と社会正義の実現」という弁護士法第1条の理念を意識することが大切だ。そんな私の視点からは、政財界の実力者が集まる高級クラブでトランプと知り合い、その師匠となる辣腕弁護士ロイ・コーンの価値観ややり方は必ずしも肯定できるものではない。彼がトランプに教えた勝つための3つのルールは次のとおりだ。すなわち、

ルール1. 攻撃、攻撃、攻撃あるのみ

ルール2. 何一つ認めるな、全否定で押し切れ

ルール3. 勝利宣言せよ、決して負けを認めるな

この3つのルールは若きトランプの胸に刻印され、呪文のように唱えられるようになったが、その是非は？

本作前半は、コーン弁護士がトランプにこの3つのルールを徹底的に叩き込むストーリーが興味深い。うって変わって、本作後半は、弱っていくコーン弁護士と対照的にたくましく立ち上がっていくトランプが3つのルールの“権化”として、アメリカ社会を席捲していく姿が描かれる。2025年1月20日の大統領就任式で全世界に向けて力強い就任挨拶を行った直後、100本以上の大統領令に署名し、就任初日から華々しい活動を開始したトランプは、今この3つのルールをいかに実践しようとしているの？それをしっかり検証する必要がある。

## ■□■監督は？脚本は？配給は？米国公開は？妨害は？■□■

本作を監督したのは『ボーダー 二つの世界』（18年）（『シネマ46』未掲載）、『聖地には蜘蛛が巣を張る』（22年）（『シネマ53』187頁）で世界的に注目を集めたアリ・アッパシ監督。脚本はアメリカ人で政治ジャーナリストとして活躍を続けているガブリエル・シヤーマンだ。しかし、なぜイラン出身で、テヘラン大学に在学中にストックホルムに留学した後、デンマーク国立映画学校で演出を学んだアリ・アッパシが本作を監督・製作したの？

2024年11月のトランプとハリスが対決した大統領選挙では、たまたま(?)トランプが勝利したために本作が注目を集めることになったが、もしトランプが敗北していれば、本作は見向きもされず、興行的に大失敗したはずだ。また、いかにアメリカの政治ジャーナリストであるとはいえ、2016年から2020年までの4年間、大統領職を務めた人物のセックスキャンダルを含む赤裸々な人物像を「APPRENTICE」というテーマで脚本化していくのは難しいはず。始皇帝やナポレオンの偉人伝を書くだけなら、いかに魅力的な人物像に仕上げるかが脚本家の腕の見せ所だが、2024年11月の大統領選挙で勝利し、2025年1月からホントに「トランプ2.0」の主役になるかもしれない人物をテーマにした商業映

画『アプレントイス』の脚本を書くのは、ホントに至難の技だから、そんな難作業にチャレンジしたガブリエル・シャーマンに拍手！

早くから話題を呼んでいた本作は、2024年3月のカンヌ国際映画祭でワールドプレミアを迎えると、批評家からは賛辞をもって迎えられた。また、カンヌでの上映以前からイギリス、フランス、ドイツ、カナダ、イタリア、スペイン、オーストラリア等での劇場公開が次々と決定し、日本でもキノフィルムズの配給により2025年に劇場公開が予定された。ところが、本国アメリカでは配給会社がなかなか決まらない状態が続いたらしい。その1つの要因は、2024年5月22日にトランプ陣営の弁護士が本作の国内公開を停止するよう求めた文書を製作陣に送付したためだ。そこでは、トランプによる元妻イヴェナへの性暴力などが描かれていることを踏まえて、「この映画は事実に基づくトランプ氏の伝記とされているが、真実とは程遠い」「名誉を毀損する茶番劇の配給と販売を速やかに中止しなければ、しかるべき法的措置を講じざるをえない」と主張したようだ。

そのような妨害活動にもかかわらず、全米では2024年10月11日に公開されたが、その反響は？

## ■□■APPRENTICE とは？お前はクビだ！の決め台詞は？■□■

本作の原題は「APPRENTICE」だが、これって一体ナニ？APPRENTICE＝見習い（徒弟、年季奉公、初心者、実習生、練習生）と訳せる英語能力を持っている日本人は少ないだろう。他方、2015年11月の大統領選挙で、「世界初の女性大統領の誕生！」と期待された民主党のヒラリー・クリントンを超える番狂わせを演じたトランプ大統領については、大統領就任後、さまざまな経歴が語られた。

本作が描くトランプタワーをはじめとする不動産王としての姿は、彼のビジネスマンとしての最も“主流の姿”だが、アメリカで人気を博したTV番組「The Apprentice」には、不動産王で後に第45代大統領となるトランプ氏がホスト（司会）を務めた「ドナルド・トランプ版」があり、2004年のシーズン1から2017年のシーズン7まで放送されたようだ。同番組はニューヨークのトランプワールドタワーを舞台に、出された課題を参加者がチームに取り組んでいくもので、課題の最後に全員をボードルームに集め、勝者を発表。そして敗者の中から脱落者を選び、ホスト（司会）のトランプ氏が「君はクビだ！（You're Fired!）」と宣告するスタイルだが、そこでの司会は、いわば彼の副業だ。しかして、同番組における彼の決め台詞は、どんなケースで、どんな風に発せられていたの？それも興味津々だが、他方、もしトランプがロイ・コーンから「お前はクビだ！」と言われていたら、さて彼はどうなっていたのだろうか？

## ■□■辣腕弁護士の末路は哀れ！対照的にトランプは？■□■

本作のパンフレットには、村田晃嗣氏（同志社大学法学部教授）のReview「権力と欲望の四重奏」がある。そこでは、

① MAGA（アメリカを再び偉大に！）をスローガンにしたトランプ大統領の手本は、第

40代大統領ロナルド・レーガンであること。

- ② レーガン大統領には、生涯頭の上がらない恩師（メンター）、ルー・ワッサーマンがいたこと。このワッサーマンは、ハリウッドのプロデューサーで、俳優レーガンのエージェント（代理人）だったこと。
- ③ トランプにとってのワッサーマンがコーン弁護士だが、コーン弁護士にとってトランプはアプレントイス（見習い）だったこと。
- ④ トランプは金髪の美女に目がなかったが、コーン弁護士はゲイを差別する隠れゲイであったこと。
- ⑤ 長く続いたワッサーマンとレーガン大統領との関係とは異なり、コーン弁護士とトランプの師弟関係は、コーン弁護士がエイズを患った上、1986年に死亡したため長く続かなかったこと。
- ⑥ しかし、虚栄と強欲が共通するこの師弟は、「欲望という名の電車」に乗って、1980年代のレーガン治下の「第二次金ぴか時代」を駆け抜けていったこと。
- ⑦ 1989年にレーガンが退任すると、不動産王トランプの出番は少なくなったものの、2004年から12年まで続いたTV番組『アプレントイス／セレブたちのビジネスバトル』でホスト役を務めたトランプは大活躍を続けたこと。

政界に進出した後のトランプの姿は全世界の人々がよく知っているが、見習い時代のトランプとコーン弁護士との師弟関係は、本作を観なければ誰もわからない。「青は藍より出でて藍より青し」とはよく言ったものだが、あれほどアクが強く、3つのルールをトランプに徹底的に叩き込んだ弁護士のコーンが、エイズのため1986年に死亡してしまったのは実に残念だ。本作後半で見せつけられる、そんなコーン弁護士の没落ぶりは痛々しいが、それとは打って変わって、師匠から立ち上がったトランプの急成長ぶり（モンスターぶり）はすごい！そんな視点で大統領就任式とその直後のトランプ大統領のフル稼働を見れば、彼の一挙手一投足はより一層興味深いはずだ。

## ■□■就任式と「またトラ」の始動に全世界が注目！■□■

アメリカの首都ワシントンの冬は寒い。そのため第47代大統領トランプ氏はパレードを中止し、連邦議会議事堂を会場とした就任式で、30分間にわたる自信たっぷりの就任演説を行った。その最初の言葉は、『エリザベス：ゴールデンエイジ』（07年）（『シネマ18』174頁）を彷彿させる「米国の黄金時代が始まる」だったから、なるほど、なるほど……。就任式でとりわけ注目を集めたのは、メラニア夫人やトランプファミリー、そして新政権の閣僚、トランプ氏に近い各国首脳らとともに「特等席」に座った米IT企業大手のトップたちの姿だ。その面々は、①実業家（テスラ）のイーロン・マスク氏、②グーグルのスンダー・ピチャイ最高経営責任者（CEO）、③アマゾン・コム創業者のジェフ・ベゾス氏、④メタのマーク・ザッカーバーグ氏だが、その意味するものは？日本からは従来、駐米大使が出席していたから、今回の岩屋毅外務大臣の出席は異例。マスク氏との接触がカメラ

に収められていたが、彼の主たる任務は石破首相とトランプ大統領との首脳会談の実現に向けた地ならしだ。

就任式を終えたトランプ大統領の始動は、大統領就任時歴代最高年齢の78歳7か月（ちなみに、2021年1月のバイデン大統領の就任は78歳2か月）とはとても思えない素早さと力強さが際立っていた。移動した会場で大勢の支持者たちを前に、大統領令への署名セレモニーに臨んだ彼は、バイデン前大統領が出した約80本の大統領令を撤回する大統領令に署名するとともに、この会場だけで約25本の大統領令に署名した。そのテーマは、①移民、②関税、③地球温暖化、など多岐にわたり、いずれもバイデン政権下の4年間の政策を180度転換するものだ。事前に準備され、かつアナウンスされていたため混乱は起きていないが、その影響は今後数ヶ月の間に広がり、日本を含む各国は適切な対応を要請されることになる。

トランプ氏は大統領選挙における圧勝と共和党のトリプルスリー達成を強調し、バイデン政権を全否定していたが、アメリカ世論の支持を得ているのは、過半数をかるうじてキープしているに過ぎないから、何らかの失政があればすぐに風向きが変わってしまう危険性をはらんでいる。また、「トランプ2.0」の任期は4年だが、実質的な勝負は中間選挙までの2年間。その2年間で公約どおり「アメリカ第一主義」の成果を上げることができれば、後半の2年間も“トランプ節”を順調に炸裂させながら、2028年11月の大統領選挙をバンス副大統領やトランプ・ジュニア氏に託することができるが、移民問題でも関税貿易問題でも、あるいは外交安全問題でも少しでもチョンボを犯し、ブーイングを受ければ、たちまちアウトだ。その点、西欧型民主主義国家は、独裁型全体主義国家に比べると明らかに脆弱なことが心配だ。中国もロシアも、目下トランプ大統領と真摯に向き合う姿勢を示しているが、その実は・・・？

良くも悪くもアメリカは、そして日本をはじめとするアメリカと同盟を結んでいる各国は、今後4年間はその命運をトランプ大統領に託したことになるわけだから、その始動する姿をしっかり見守りたい。そんな心構えを固める上で、本作の鑑賞がよい機会になったことは間違いない。そんな本作を監督・製作してくれた、イラン生まれのアリ・アッバシに感謝！

2025（令和7）年1月23日記